



NPT再検討会議関連のNY行動に参加して

和泉 伸子

二〇一〇年五月三日から国連で開かれる核不拡散条約(NPT)再検討会議の成功を目指してとりくまれた「5・2国際行動デー」とその関連行事に参加するため、倉敷医療生協から私を含む四人がニューヨーク(NY)に行きました。岡山県から二九人、全国であわせて被爆者一〇〇人を含む一六〇〇人が参加しました。

キャンドルサーブिस

【五月一日】岡山県平和委員会の平井昭夫氏と私は、他の岡山県代表団より一日遅くNYにつきましました。私はその日同室になった広島県の女性に誘われて、広島独自の取り組みのキャンドルサーブिसに参加しました。午後七時でもたくさんの方がいるユニオンスクエア広場の一角に二〇〇人くらい集まりました。被爆者と被爆二世を囲んで日米の平和団体、音楽家、ボランティアの人たちが丸くなって歌を歌い、静かに流れる音楽の中で祈ります。たくさんの方のロウソクを道行く人たちにも手渡してどうしてここで祈っているのかを伝えました。広島局のTV局が

きて取材をしていました。

署名行動とパレード

【五月二日】朝一番、一年半かけて集めた反核署名を三月末に船便で発送した後も、出発ギリギリまで集めて手荷物で持ってきたものを一ヶ所に集めました。ここまでの数が今日ハマースヨールド広場で発表されます。

一〇時から一六〇〇人がいっせいに街頭に出て署名行動をしました。交差点のまわりなどにちよつとした広場があり、イスや丸テーブルを置いているところもあります。私たちは一〇人ぐらいのグループごとに、手作りの英文反核横断幕をひろげて目に訴えながら、英文の用紙を差し出して署名をしてもらうのです。言葉は通じなくても心配はいりませんでした。ただ英語を読めない人が結構いて、「人種のサラダボール」といわれるNYの一端を垣間見た感じでした。それでも私たちは用意してきた折り鶴に英文のメッセージをそえて配りながら署名を訴えました。彼らの書いてくれる字はなかなか読め

ませんが、でも嬉しいものでした。この日はとても暑かったのですが、岡山代表はお揃いの黄色のジャケットを着てがんばりました。

午後からは、翌三日から始まるNPTR再検討会議の成功にむけての大パレードが繰り広げられました。タイムズスクエア広場にどんどん人が集まり始めました。「核兵器のない世界のための国際行動デー」。私たちはまさにこの日のためにやってきたのです。日本を初め、世界中から芸術家、法律家、宗教家、政治家、平和活動家、一般市民などあわせて一万五千人が四二丁目大通りを通り国連本部前をぬけてハマーシールド広場までの2kmをパレードしました。横断幕を持つたり、幟を掲げたり、楽器を鳴らしたり、歌を歌ったりしながら歩きます。顔にペイントをした人、和服の人、お揃いの服で決めたりと、それぞれがにぎやかな恰好です。

パレードの途中でいろんな人たちと話すことができました。黒人のとても小柄な婦人と出会いました。彼女のTシャツと帽子にはさまざまな平和のバジがいっぱい光っています。私も安全ピンの九条ブローチをつけ加えさせてもらいました。彼女は日本の憲法九条を知っていました。みんなから取り囲まれた彼女の笑顔はステキです。先日九州の友人から「命を守る運動って楽しいね」という言葉を聞いたばかりでしたが、この二人には共通するものがあります。

目的地の広場には六、九〇一、〇三七と大きく



後ろに段ボール積みの署名の山がある

書かれた署名の山が待っていました。国連でNPTR再検討会議議長と国連上級代表(軍縮担当)の二人に署名の一部を手渡すセレモニーがあったあとで、二人は署名の山をこの目で見たいと広場まで歩いて行かれたそうです。会議開会を前にしてお二人の意気込みが伝わってきて感動しました。

原爆展とシンポジウム

【五月三日】国連でNPTR再検討会議が始まりましたが、殆どの人は議場には入れません。

私たちは国連のロビーであわせて開催された原

爆展に行きました。写真などの原爆資料がたくさん展示されています。朝早くに行き混雑する前にゆっくりと見て回りました。大石又七氏(第五福竜丸で被爆した元乗組員)や、川中優子さん(岡山県原爆症訴訟原告、坪井直氏(広島県原爆被害者団体協議会理事長)、谷口稜嘩氏(長崎県原爆被災者協議会会長)他の方々が見学者に説明をされており、またおかやまコープから来ているお世話係二人も応対していました。私たちが外に出るころは国連のビルから道路にはみ出して見学者の長い行列ができていました。

午後からリバーサイド教会でシンポジウムが開かれました。この教会は、かつてマーチン・ルーサー・キング牧師がベトナム反戦の演説を、ネルソン・マンデラ氏が反アパルトヘイトの演説を、そしてたった二日前にはパン・ギムン国連事務総長が国際平和会議閉会総会で核廃絶の演説をした会場です。一、六〇〇人が集まって満員だったそうです。

シンポジウムの前にピースコンサートがありました。歌手のきたがわつと日本から彼に同行してきた一〇〇人の合唱団やアメリカの労働者合唱団の歌声が一時間にわたって教会の高い天井に響き渡りました。

それからいよいよ「核兵器禁止・廃絶のプロセスをいかに踏み出すか 政府代表とNGOの対話」と題して公開シンポジウムが開かれました。

日本原水協事務局長が司会をして、エジプト

軍縮大使、NPT・NY行動国際企画委員会代表、西部諸州法律財団代表などが発言しました。

署名行動と女性の集い

【五月四日】午前中岡山代表だけでも署名活動をしようという街頭に立ちました。ドイツから来たという男性は初め、核施設で働いていたから署名はできないと言いがら、体験談を語っているうちに最後はすすんで署名をしてくれて、家族の話にまで及び、記念写真も喜んで応じてくれました。バンザイ！（実は私は核の話など全く分かりませんでした）二時間たらずで一八〇人に署名をしてもらいました。このように



核施設で働いていた人も署名

して滞米中にみんなで集めた署名は二日の集計以後一〇、〇〇〇筆を超えました。

午後には女性の集いがありました。多すぎて会場に入りきれなかった人もいました。アメリカ、カナダ、フランス、ドイツ、マーシャル諸島などの女性活動家が発言しました。そのなかに二日のパレードでお会いしたあの小柄な女性が：彼女が「おばあちゃん平和旅団」のバイニーさんでした。彼女は「戦争は貧困をうみ出し、貧困はさらなる戦争を引き起こす」と発言しました。

集いが終わって会場を出ると、外で待っていた人たちと歩道での交流になり、また日本から持ってきた横断幕やタペストリーをプレゼントしたりして、別れがたい雰囲気が続きました。

ボストンへ

【五月五日】後からNY入りをした平井氏と私以外の岡山県代表団は殆ど帰国しました。残った二人はあちこちから来た四九人で新たな「ボストン訪問グループ」になり、電車の窓から景色を楽しみながら四時間北上の旅をしました。

ボストンは三日のシンポジウムで発言した、NPT・NY行動企画委員長のジョセフ・ガーンソンの地元でした。彼は広島・長崎などの会議があるたびに来日しています。

彼が先ず案内したのは「平和の家」でした。

戦争その他で心身に傷を負った人々を牧師と信者、ボランティアの人たちが、リハビリでこれまでに五〇〇人以上援助してきており今も活動を続けています。その広い屋敷で手料理をこ馳走になりました。私たち四九人だけかと思っていたらなんと、きたがわてつ氏と一〇〇人の合唱団、それに宗教家も合流していました。一六〇人分を手作り！ 全くNYではなかった温かいおもてなしでした。

次にまだまだ明るい午後七時、歩いて三分のファーストチャーチに行くと二〇〇人くらいかな？ たくさんの方が集まってくれていました。彼らに「核廃絶でがんばっている日本人」と紹介され、広島爆撃者と被爆二世が体験などを、平井氏が日本での活動を話しました。また日米両国の歌手による歌の交流もしました。

高校生と交流、お別れ会

【五月六日】午前中ケンブリッジ高校を訪ねました。図書館の二階に一五〇人の生徒と数人の先生が集まりました。ガーンソン氏は生徒たちに、NPTのことと日本で集めた七〇〇万近い署名はネットで集めるのではなく一人一人対面して書いてもらったものだと言明しました。被爆者や被爆二世、平井氏の話のあとで、質問はあるかと言うとすぐに生徒の手が上がりました。「ひどい原爆を投下されて日本人はアメリカ人を憎まないのか」と、「戦争が終わって何が変



ボストンでジョセフ・ガーソン氏が出迎えてくれた

(左から2人目が筆者)

わったのか」というものでした。被爆者が「アメリカ政府を憎むけれど人は憎まない」、「戦争放棄の平和憲法をつくったこと」と答えるとわあつと喜びの拍手が起きました。あとで先生に「彼らは自分で希望して聞きにきたのですか」と尋ねると、「そうです。生徒のことを誇りに思います」との返事でした。

アメリカ最後の夜は四九人のために会費制のお別れ会を用意してくれました。中華料理店で四つの丸テーブルに座りました。私の横にあとから来た人はガーソン夫人でした。みんなの質

問に一つ一つ答えてくれました。ガーソン氏は子どものときから戦争はよくないと教えられて育ちました。結婚して二人はヨーロッパに渡り戦争被害者や貧しい人のために働いてきました。彼は家では家事を手伝うそうです。三歳の男の子のミドルネームは「マコト」です。

会議の最終文書

NPT再検討会議は五月二八日に終わり、全会一致の最終文書が出されました。私たちの集めた七〇〇万筆の署名は大きな力を発揮しました。文書に「市民社会からの新しい提案、及びイニシアチブに注目する」とはつきりと書かれて、反核平和運動、草の根運動の役割が評価されました。

最終文書の草案には期日が明記されていません。しかし中国以外の四つの核保有国は、核廃絶につながる明確な期日を決めることに激しく抵抗しました。一カ国でも反対があると最終合意にならないので、期日は削らざるを得ませんでした。

けれども圧倒的多数の非核国と市民の平和運動の力で、「核兵器の完全廃絶に向けて具体的措置を含む核軍備撤廃」に関する「行動計画」に取り組むことでは合意をしました。二〇一四年までに核廃絶に向けてどのように「努力」するかを報告することが求められ、二〇一五年の再検討会議でそれが検討されることになりました。

このように実質的な足がかりが作られて一歩前進したことを、余分ながら最後に一言つけ加えます。

(いずみ しんこ)